利き手矯正経験者における利き手矯正の必要性と自認する利き手について

福井県立武生高等学校

要旨

本研究は利き手矯正経験者における「利き手矯正の必要性」と「自認する利き手と実際の利き手の差異」についてのアンケート調査を行った。結果、矯正に一定の必要性が認められて、利き手の差異も認められたが、後者については、半端な矯正による優位となる手の混在が原因として考察された。

1 はじめに

利き手矯正についての先行研究では、多数において否定的な見方をする記述はあるものの、当事者自身の利き手矯正への捉え方についての意識調査の結果は確認されていない。その他、自身の利き手を左利きだと自認する者の多数が、動作によって使う手の左右が異なるクロスドミナンスであるという記述を含む書物もある。しかし、この命題に対する統計データも確認されていない。

本研究は利き手矯正経験者における「主観的な利き手矯正の必要性」と「自認する利き手と実際の利き手の差異」について、明らかにすることを目的とする。

2 検証方法

いずれの調査も、福井県立武生高等学校の全校生徒のうち、箸や書字活動などの限定的な矯正でない、総合的な矯正を受けた生徒を対象とした。そのうち、有効な回答は13件(n=13)であった。調査は任意回答のオンラインフォームにて行い、期間は2024年8月9日から同月19日までであった。

2.1 利き手矯正への意識調査

回答者が経験した利き手矯正について、その必要性と経験に基づいた根拠をアンケートする。

矯正の必要性については、「矯正すべきだった」「矯正すべきでなかった」の二者択一形式で質問し、その根拠は記述形式で回答を集めた。

2.2 利き手自認への意識調査

回答者が自認する利き手とその根拠をアンケートした。その後、大久保街亜, 鈴木玄, Nicholls Michael E.R.による「日本語版FLANDERS利き手テスト」を実施し、結果を比較した。

自認する利き手については、「右利き」「左利き」「両利き」「クロスドミナンス」の中から一つを選択する形式で質問し、その根拠は記述形式で回答を集めた。

3 結果

3.1 利き手矯正への意識調査

利き手矯正に否定的な立場を示したのは13名中2名であり、その他は肯定的な立場を示した。否定的な立場を取る根拠として、利き手矯正の必要性が感じられないことが挙げられた。一方肯定的な立場では、矯正を通して生活で苦労する場面が減ったと感じられたのを挙げていた。

3.2 利き手自認への意識調査

自認する利き手は右利きあるいは左利きであるものの、利き手テストではクロスドミナンスと判定される者が右利きの一部に存在した。一方、左利きと自認する者は、質問、テストともに左利きであった。なお、いずれの質問においても、両利きは確認されなかった。

4 考察

結果から、利き手矯正経験者について、過半数が「障害などを負わず、かえって生活しやすくなった」と利き手矯正を肯定的に受け止めていたこと、右利きを自認する者の一部がクロスドミナンスであることが判明した。

このことから、利き手矯正は当事者が苦労なく生活を送るために一定の必要性があると言える。だが、一部の当事者には自認する利き手と実際の利き手に差異があり、矯正をされた動作と矯正をされなかった動作が混在することで、自分の利き手を適切に自認することが難しくなっているのではないかと考えられる。

5 結論

この研究の目的は、利き手矯正経験者における「主観的な利き手矯正の必要性」と「自認する利き手と実際の利き手の差異」について、明らかにすることであった。利き手矯正の必要性については一定のものを確認し、また利き手の差異については、複数の動作で利き手がばらつくことで、利き手を自認するのが容易でないのでないかと考えられた。

6 今後の展望

今後はより母数の多い集団を対象とした調査が必要だと考えられる。また、障害など、生活で苦労している状態とそうでない状態の間のラインについても、研究の余地があると思われる。

参考文献

中田華子(2018)「書字活動における利き手矯正とその在り方について」『横浜国大国語教育研究』

大字直哉(2023)『左利きの言い分』PHP新書

大久保街亜, 鈴木玄, Nicholls Michael E.R.(2014)「日本語版FLANDERS利き手テスト――信頼性と必要性の検討――」『心理学研究』